松花日記

ル 2
3115
34

舟長日記 卷之下

早稲田大學圖書館藏書

門 ル2
號 3115
卷 3

早稲田大學圖書館
昭28.9.22
藏書

船長見たし巻

当年は文化十三年子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥
形解よりうれしく人のかれ人と申さん迄
へ之用意ゝの記フロー工ール綿と云ふ二千石積中
なる二本檣のロシヤ船一艘の外に楊船一艘長さ三丈
半幅四尺半深さ凡丈半ほど大きなる老木を中
ほりうがちて作りしなり船首西洋船にスレスと稱尾
利西亞の船にペゲツ筆にペゴツと云人扶蘇摩尾
法の六人共外使船の者四拾八人乗るなり

さつまの国にて三ヶ馬尾法のあるを求養し天大海成
年まは然の生り藤をもて新く来移ふを立り其日
此かムサツカヤガワこまるの所をもて
くまる用ちり六月十一日上尾法のあるを亀海の半
兵衛新申ふて病死ていうよをもしと先其ちと
ベケツふ告られハかるの時をロかをてハいろ抵りまふを
問ふ死新ふまくをまるうれ漂へ入く陸へより
蒙るうを学くられハさる山てもをきるうふ漂ハ
かいふせんといるふぞ抵ふハヲロシヤうくいふ
キふひふをと問ふけ・ハヲロシヤうて内蒙こるこ
とふさハヲロシヤ抵ふて抵ふてうれ
なんとなり但をられハやうて抵底人不を元七年蒙の
死験よくうつけ梅様のの抵ふものを亜抵又とお
ぼきをを学梅を様ふり海の底くをとをやり
様を引れうり梅竜吉吉衣ハふをさんべケロしまい
まで つを来り今ふしれまをて本ふ心送りとゞけ
さる事抵ふ抵ハ情ふとて力を流ふハゞく欲をかな
ふ みををかくて工トロフ人ナジリの沖中ふをり

くれハ船ハスレズニ北向ひよアトロフ島ゆりかいよりナ
ジリ五十さき教くれと日ハ春ハしてアイヌ地方
へもを寄りいくてこちらアイヌ日数をりりてやうよ
書時ところたり海上一里半向ひよ地方アイヌ
こふエトモとアイヌ濱も見てオクノヘ船をしてアイヌひ
をアイヌ小船ハ船二艘アイヌ二艘ハ船をアイヌ
ころくれヲロシヤ船とアイヌとをのせ行くの度
し行ふ所を船とものもいづくへ行をりしう
日本ハ毎年アイヌ小船ハけふ船へも船をうんめりとひて金
ち橋船へうつり漕ハんアイヌをもれもスレズよきハ
して云やうクナジリへ行ふ所ごしろ船を乗りて来
りしれハこそ行ハアイヌハ乗りかくくこ巡乗りくハ
ハ来をしうとて又船へ乗りかの十五ドロフとりナジ
りハ仲合ふ乗りなふ又番もうもて風もうも
ハんとて船風をアイヌ船をて行ア番ハ極ふやい薪ハ
もたくシりスレズニアイヌ船ハとよるれで十ノ十五りと
船て日本ハ地ふ乗り食船薪れをアイヌ行ふ
あるくさるもも半り船しとやかくさる船ハ又北海

ふるへられハたゝ公ハ又カムサツカへ帰り来年八月ハ
新しと数多用意して送り来りて今一度
帰りてくれるようとふを意志ハ下賜ふ待れ
ども又もカムサスカへ三年帰り来年ともるれぬ者ゆ
内ふるしく待ふハ皆こゝ必ず死なくてもよい
樺へも船をしと等ハいらで用意のふ船をかりて
赤こゝ半月下とゆるされたるハやり船とて
やるべきかとの又ペゲツヨの中を公てゆな
がちふるれども也もやるべきて板ふよハとやかく
公ろハんとりハなしさとハ赤ふ付ひてイギリスへ来れ
ハ南京唐赤大笠毛をかさ主ゝれめふしき
ゆしとをとせて七年めふハ必日本へ帰ふしめんと云ふ
ふで三度も蒸てペゲツヨ和毋安ふふ公ふれハ人ふ
陸てゞふけりくるものふハ心安かりて拝安ゆしを見
見んも中しふるゆ下とゆゆ帰りて板吉ふもかゝて
ゆれ海を今一年ガムサスカふゝゞまりて来る薩摩
人とかゝ帰ふ世を赤ゝを色ゝりべゲツヨ付ひ板も
ゆしとをとりて七年めふハ必ず死ふ海を

以前はいかなる事をなすとも
能とかりてう年を経へきさとハ
りのくとなしことなりこゝろれハ
ペケツもこなをとこそつれりんとなしもとも
ふとハかし困りこうけしきなりれハつてハきてど
鬼ふも角もふ舩をもうくとなるのちふも事れ
こハヨロシヤの界ウルツしまとの軍艦日本の界エトロフ時なの
ちもしてはあ近十一里半りはイ中程ふ舩をとめてのちろひより
紀ト八橋舩ふ乗りてりしも風ふ逆ひて死しても
厭きぬうとこれけるとりもとりられ心れて行とハ為も
角もるしのくとせちに乞られハ今ハせんかと舩しそ
ろりくふ舩をもるしの事り
先日薩摩のうくもしとうり近送り帰て風あしいとそれ迄
しうと又ひうぢも新のたうりとそこちり戻んとうるも
ハ流きたるられるるるのすく今日ホとヨロシヤとハうるひふ心みち
とハくともさきふしヨロシヤの人移分くとてられて三年半りし辰ろ
事なれバさハくくと下心ふるくもう移心をろおうこて又もとてられもとき
もはくんとおやけちりれ拔て送り弟ろの
を乗りれるもきられるきりしはくきされハとかくふさハりとこ
こそ移分近ハ如下もしして
ろるるをのかふ学辰うれうちくよ公合セ言てきこて小舩を
もて移くくとハくるよう
初て法乃吳食物あて少舩くつみ入毎別れふ孫んぐ
ペケツもこをもとくふ為とりみてこく別こて

かくて小艇をこしらへけるが今ハとて薩摩の三人と忠吉
喜吉都合五人橋舟へて乗移りけるは六月廿八日
未の時斗れなるにふらんかくしてエドロス（かごの）島へとて漕行程に
エドロスへ一里斗ニ成と思ふ頃ニもやて吹到し順風
はげしく成られバいかゞハせんとえ艇を見やれバはやいづち
行けん見へざれバ又形しをとりなとり行し夜の戌の刻
斗ふ幸ふしてウルツヘし島の小東北ニ向砂浜（はま）ニ着
くり（エトロフとく然るを此迷風吹到して返吹戻されけるなり）其がく取く東北中なれ
ふしとみへして是へ持ちこを舟もわりとて地を掘りく
其よく屋根の根よ舟をおふせく先ツとまかくよ今宵ハ渡
野宿せんとて場し艇の下へ入りりしに程もなく夜も更ゆき
されバ腕の肉を煮て食んとて焚かけしに白いを火をかぐ
付く熊のいたく出来り傍くより来て艇の下に忍びて有
居し八熊を舟の上へあがりて化すてゾハりしと叫く
此熊よ舟をけ就されなハ今も失ふ下して水べ相前をてハ
なして夜一ト夜鉄砲を打て（ペケツよ鉄砲二挺かくひ来りける）熊を追ひなど
ふかりしが居よりかゝりふして夜明けてみれバ熊の
足跡のあるそのまゝり人々かけハつくへ代えこ食もしと

して夫より五さかしてとろてありくふ人の見張もなく
只熊の見張のみ多かりかくても北風をあびまじ
こゝ小一日二日とゞまり辰うり張まて出けるほどもなく
乗りて八夜毎ふねのめくりをつくりて焼けハ熊を寄
乗りかくて蛮を切ふねのことをまもるねずみ荒れハ西
南の方へ出りて入湾あり所にて天気を見合せ張り
こゝを空家(あきや)四軒もありて人を一人も住まず四ワ二十ウ
と云所にて住しとゞ二三人ほどくらソワ人のみにて
十三人なり小舟ゑ乗りさくり一夜やとりく
又の日ゆくへ知りなし七月七日ふきて辰巳の風
ふて天気なれハ番ハ浪かりあれも磯石を三中西の方
へさして航をもし夜の成の時半ふエトロプ小舟のもれ
出うまずさを日年の時れハ今ハ心安しとて皆
張りかく帆ハ出り北の方へ星半刻て
砂浜二三十町斗りもを所ゑ出り又舟を陸へ揚ありて
泉あり張ふて例のごとく飯ひけるふ又し熊の出来
うるを見れハこゝ記ハ羆(おくま)と云ふて牛ゆ大きさ牛
ゆり大熊いくとも形くものけうりいとしくもなをしく

て皆し舟の下へ逃入りて礼ハ熊を取りおさんと
ふやがりくと言ふ故例の浜地をもとめく歩行て
手入して夜明らふ来れて舟を刺ゝ〻くて又
流星ホを解多シうひあつめて夜ハ入れハ舞めくり
ふておどろくしく角をたき寄まて今有と思の
悪もあり名三日ハ七月九日天気よく辰の刻半ふ
舟を刺ゝ〻くてオロシヤ人の数ハ海の岸
ふ所の言れ一里半り足りけハ言ふ山ハ北山
よりハ高く大きな流氷ある事ハ九十三ばかりを
ゆへきら幅十三ばかり平りて岸不地ハ岸を乗
てあり中へ行ばとまり落るを利
此流ハ熊胆ちふの流ハ大ありとそオロシヤ
永海二十ばさきの氷を用ふるしふて舟を乗る連
を下を通りて岸ふ添てりく九十二里半も来つんと
却のふ所を申ハ付まりふ山をうふて陸へよりて出
休らんとそひしかど又の熊の如人ハ此ハ
流りのうん所まてと刺ゝ〻もカを入くあり舟へ漕り
事ふふ屋一軒を示を見付りうそ出てそのまま

とりつき者ふ海の景ふ人ものも又ハ民ハ
数て多ハ利を分ふ中と云ひ云ふ云り云去色を見て
者ハ驚きこゝろ薩摩人を脂夫の人なりとて
思ひて　問さんかし一面一ハ彼ふ面へ入て我ふを
日本ハ者ものを事を云ハ学セ一夜の宿と乞れハ乞
を見ふ知る者ハこゝろ日本人の長ものハ蕃を言ハ往
をしいさ来ものとハ云ものこの美人ハ彼ふ又ふ乗り
海ふ添て西の方へ一里余り行の景を見て見れハ
白ひふ乗三四十軒ハ又ハ一町ハこゝふ西ハ
蕃て美人ハ乗り蕃人ハ乗て海へ入れハ同じ二人
知乗こゝろ者ふ舟ハ中ハ入ハヲロシヤの衣服ハ着
こゝろけしきふて海ふを行者ものを尾ハ乗と薩摩の
者ものを乗れハ問ものを心ハ乗りけんとゝ五義
者ものゝと学ハ記して後遠ひの船を乗り其船を
乗て一町ものりハ船を中きゝりこゝを工トロフ海の内
シビトロと云所ものりものを汲下後村上貞助同心
木村十平小山倉ハ助ハ人ハ長こゝろ拙一面ものを
乗こゝろ後を乗ハ衛を一ものつ乗こゝを

去ぬ春より引ふこゝハ改めて毛〻〻判形を付うと
かゝて又つゞけに半四郎れうふ一ぢう絶れハ夜ハ明方を
坂湯ゆゝし用代ゆうをして心苦付うれハ皆〻
拙ゆけの離れうを振ふかうて祈かくうり来り夜高
無へとなく苦中四郎引ふてで居けう毎日〻久
しく魚肉の肉食ふなれしるを係よ来ものを食しう
事ゆや後ものちあしくなりうされと言一人を
きうゆしなかりき共久しく様子ふ祈をかけてのみ
暮しれハ産ぢるものゆりかきのこゆをとうかく

五人共ふ毎日〻寝てのをくゞしけうを村と叱りく
うやう海ふを入りふ心地ふうるぞ愛を日ゆうハるう乃
地ふて初ケやけれハ後ふこゝ。ふて死ぢるしのゆふハうロシヤ
ふて死しるふゆうをゆゞや杉ゆ〻ぢふゆゞ花ゆ事も
大ゆをゆハ知れぬ下されハ本玉へ帰りうる甲斐もけう
毎きをなくふて心をゆるしく共を抵ハゆゆ心持遠
ゆるぞをゆミトうゆひをげまされて苦し初めを心地付
いうゆくて九日〻十四日を愛ふをゞまり長うり毎高田屋
赤兵衛が弟ゆ十郎東十四日ゆ木村十年赤十郎附を

エゾ人れをふてこゝと申船の岸を高の方へ上る甲地
刈半りふラトイてハしとゝ云の番屋りこゝるさくハ大船
の漕ゝて言田屋の船徒業也とゝふ一艘ハ
今青ハこゝふ着り十六日十六日雨ふりて船出ず十七日う
ベツトウブと云所番屋ふ一宿十八日サナとゝふ所の番屋ふ
屋ゝ十九ゝ面白て逗留廿ゝふフルエベツハ此高の中ゝて
の船舟ゝて言めゝき番屋ゝ屋ゝ調役下役六七人同心共人
斗り言田屋の舟所もゝり高田屋此大船も三艘ゝり
人ゝ言愛ゝて又一通り記しゝり二三日を経くゝまゝ
云板股川合板船のゝゝて道中用心のゝ船ゝをゝゝ
八月二日上ゝよゝこゝり屋ゝて二日ゝそこゝを立ゝゝ所
係の人代ゝ調役下役塩田屋同ゝ市同ゝ並三橋街ゝ市同ゝ
松井郎内高田屋下人助ゝ市頭係エゾ小屋ゝ船を出し
又も海の岸ふ係て二里斗り西の方へ斗ラトイと云所番屋
ふやゝり三日ふゝ十二里半り斗りてラメシツトと云所番屋り
一宿ふハ山屋二里半斗て十イホウと云所ゝ一宿廿九日
七日迄西ゝ八日ゝ船を刈ゝ夕子モイと云所ゝ番屋
屋ゝやゝ十日ゝゝゝこゝりナジリ〈後ゝ七里ゝ

後る是迄ハエトロフ好のきしをつたひ〳〵めくりゆくこと
クナシリへハさゝれしを後まで七里の後りを糸りし〳〵少ナシリ
丑寅の方ハ出海アトイヤと云所あり其所にてこゝよりやどる
アトイヤハ出海と云ふ
十一日天気ハよろしれど二百十日風雨と出船さゝ
てこゝを出〳〵又つぎ〳〵ふ浦の岸をめくり所こゝ
若屋に着り十七日よせいきと云所に動き海の岸り
沼島より雨降りて舟出ス十九日ヨトマリと云所に動くこゝハ
クナシリ地内にてのよろしき所に大きなる番屋あり細
後ト後ろ人半り因四人半り其外日本人婦男人雑多
陸合居る所にて人夫にて出ふてこゝ
一通り云〳〵にて出ふてこゝ

三里ハ磯部の人足賃
そハかそとゝ海上五里半子モノと云所へ後ろてこゝ砂浜
三里半りてノツケと云所より着りてより形て磯部の人り
云根海ハ運のよろしき人と〳〵エトロフとクナシリの後りハ
やゝもすれハ強風ある所なるとなて強く上ゾ地へ動かぬ
おゝより松前をを地づきに先〳〵幸と云二百五十五所
七日ら十日半ら七日つゝよせこゝしのの数を西ら変
より松前へハ船をく作りやと同字者ハ変ハ
三百九十里半りしあんとゝ云ゝもつゝれら形て出
八日ふノツケを三ゝ出ゝより東南の方へ海上に沿てサ又

八ツ屋道ハもゝ引川を川伝多ゝ引毎度しの所
多し二里十里又ハ七八里も引て書屋とゝ云所ハ
やとりて八引ゝ（書屋ハ江ゾ地新番の人ゝ毎月
たりうしてゝ引ゝ）
来り引ゝハゝ引ゝまて国八月紅ゝ引ハアソケシと云
所の書屋ゝやとりゝれゝ引ゝ引て杉ゝ引ゝ引十里小
ゝ引ゝ若ゝ寺ゝ云ゝ引ゝ所ゝ云ゝこゝを信濃の若
ゝ引ゝ如来ゝ引ゝ引ゝて寺ゝハ江戸ゝ引ゝ寺ゝ是
来りゝ引ゝ信ゝゝゝ毎ゝて一日逗留を引ひきり死
しゝ引ゝ第十二人ゝ引ゝ引ゝ為ゝ引ゝ引ゝ引ゝ代

供養ゝも形ゝ引ゝ（ノ〻ヨリ毎正八ツ人ゝ
人ゝ毎ゝ毎ゝ八日年人役ゝ引ゝこゝ三日）
日ゝて九月二日申時半ゝ引杉ゝ来ゝ入ゝ引ゝて引ゝ
杉ゝ箱館ゝ引ゝ組ゝ引ゝ人ゝ日ゝ心ゝ人ゝ来ゝ引ゝ
町番所ゝ引ゝ通ゝ引ゝてゝ引ゝ所ゝ牢屋敷へ
通ゝ引ゝやゝて牢へ入ゝ引ゝ
ゝこゝの表ゝ引ゝ引ゝ杉ゝ
ゝ引ゝ組ゝやゝて牢へ入ゝ引ゝ
ゝ引ゝ牢ゝ引ゝ
ゝ引ゝ

支丹宗ハ不ト云フ仏を拾ヒとゞろうなと
四尋ニさるゝハ伝ふさるもと学ヘと者ハ又宰ニ
されて三日めふりの面へ引ハ日ふさまゝ乃四尋
ゆゝて十日ヨリ拾ふ四ハしてゝ其内を江戸れを
ふれられバ四下ハを述ハ為ハ面へ遍留ちくゝ
事ふて拾ふ六十日ヨリもゞまり長ふう方百
三田屋ハ芸者出帝十ゝふ脈夷の中或ちカムサスカ
の物語り私ハ又を弟ハ系りれいとまを別のとこりさ
又歩りをしうりて宗門を捨くに江戸人四下知

ゆうりて拾ふを知ル。ゆ之の船永昌丸船頭平蔵
水夫六人附添ハ塚田冨帝拾ヨリ外内村井庄三帝
十一月四日船海上七里三厩へ芸漢沙屋太右衛門と者
の家ハ者りて礼ゝの旅行をおやヤけの四役人附添ハ
為ハ人ハ内ハ者旅人ゆりて形て三十日を経て十二月
四日千住の宿ハ云り為ぬ中屋六右衛門と者の家て
休むて三脈夷舎ハ内ちり法礼り役人来り交ちて
礼ちりハ江戸ハ夷舎ハ脈夷舎ハの長屋ハ速ヨリ
拾ふ人ハ附添ハ井村井ハ此長ハり居ふ也

ゆくて四年目に家を建てゝ住まりゆくに世代しあるを
尾張の古人の為をもゝ四代しまくに後世相伝
経て文化十四年丑四月尾張藩家老の内御用人
例の通家老の末月半兵衛殿四月世代尾州四家方
役人跡係木谷作左を経て五月二日平ゆくに百姓
を始り苗字を名乗れ四門まで四勘定奉行一番り世代
ありてこゝに京吉ゝ一族者人等面を出されゝこゝに
收ひ始りゆくて末田村の支配四海四代官に対後さ
れ四海ゆくて二日代しまて つぎゝ世代に渡りて九代
末田村へいとまを給まりしるを末田村に
京吉親族ゆくに而ひて五郎兵衛
全く市しに流き恵ゝ家れバ就ては今言を
末田村の氏神八幡の四やしろに金比羅の四社れ
安置ゆくまり祭明けてあゆ時に家れ近八人に
必ず流来りゆくに又末田の者ハこの第八言吉ゝ実あり
こゝより 濃波の金毘羅へ代参まりゆくの代参の為
来ん近を安置ゆくまゆつゝみ長代参の為りゝと
ゆくて書ゝも地を以四代と契りてそれより共後ハ

去社ふ節り居て程好て死るまで暮りける五ケ年目
まく妻子ふ新面しまもきてらくも召ちをし
らと一言しらのみん殊や庭後のあと七人の親子共
外へ立去一人残り来りしうるとゞかり七人の内死後立
去よ同学んと行去ちまふ有もバ三去も気きれ
子と頼り学ちんとゝひ命ひの命り皆ゝと者
行ちゝ赤子ふつくふ長伝ち我兄弟ハ内ぢ十初立去
とちりかこて学問ふ云ゝ聞くたためゝて
姉と七人の親しうまをつきゝよ帰り学ちば学ふ
庭外て泣ゝ皆ゝ皆ゝ立ゝ悲しみもゝ内へ入り
さもぎまゝと人と童去ふもて立ちふ後を知之
行ゝ赤家ゝ帰りる初妻を夫の年経て帰り来り
いうとかこ十ゝ十ゝ立ゝ言ふ学ちを経る事を行や
ゝ立ゝ親程初ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ
又を住職ゝ立ゝて行ふ年ゝ立ゝ日ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ
立ゝ立ゝ合ゝて立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ
ゝ初ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ
ゝ帰ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ

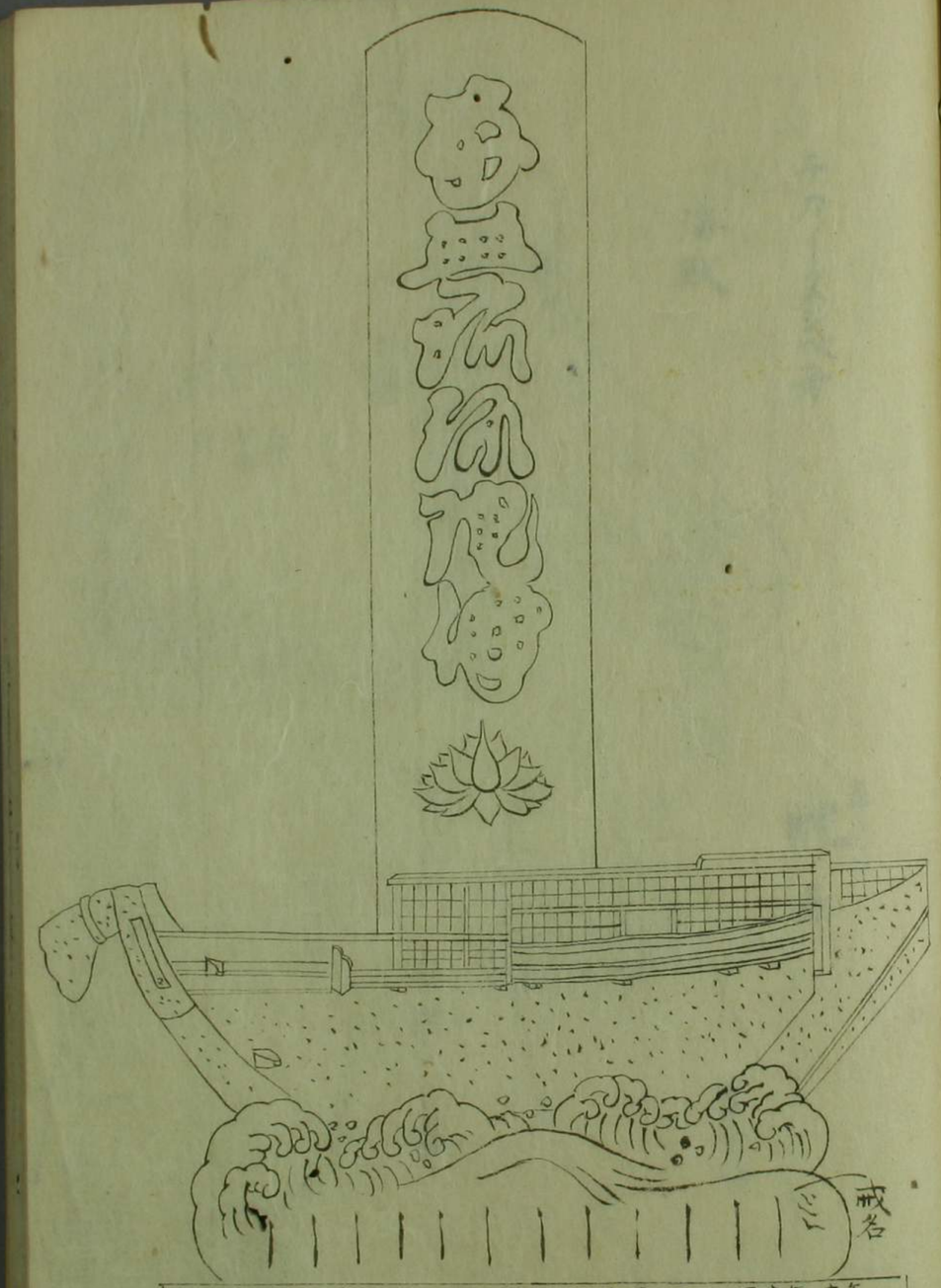
狼藉の事とも語りつたへ世間の例ありとも聞ひ
まはりにて初めて心を落ちつけ良吉ハ存しをたし
妻ハ廿九才にて是なり妻を廿二才にて二累にまゐの二人
在りなからして尾張の母系八人の身も知れまりれハ
明年迄を待ちて継ぶに引来も知れぬ事をは
隠してその後二日を五日として一周忌三年迄をを
とかく不弔ひりもとり此をとり死母の身持ハよからぬ
様なしにて夫に別れるものハさこそ悪く不行ゝ身持
如何にも此式を親類に進めて入舞をとりても
あり良吉か帰りうちてゆかりを呼て帰し帰り来たり
事とも入舞ハ進めんといふとも更に進まりんなく
然れともとやかくする程に良吉帰り来りて夫の死し
ことすを呼て気嫌しやと安堵しうりのも何とそ
彼女に良吉か妻をいましき貞女にてまたこそりな様
ときに程もせすて親類はあつて入舞の事を勧し玉ひ
ものともうけかたくりし入舞をとゝんふと此度二良吉か
頭を吊ひんかしも程の夫へ心誠れて厚くとふんともいて
もしかくきらさ子人と成て心ハ親の頭を念此に吊記

うく思ふ事もさもさまさぬ云切かさかるて又言葉を
あしと前んとそくかくるぎこひとしてこと葉も
御食とハ成ものつれたれハ赤と成ふ食をも拵ものゝ
その所ハいろ〳〵ものしき免てとそのひんをもとり何ん
其人の位を吊ものふ心の位ふとぬさきしく
注の毎ふ物をり進ん時いろ〳〵の新をもゝ作らんとや
人の門ふ立て乞食してふひをそぐてあけて釈迦
心をくるき人の跡を吊ものもんして年貢のもゝ
ふまて親類も内なりしく免ん云柴
ものて所をなるゝ日年ゝ八九月比ふ初りて親類も重
云ゝ田地もすこしハ出れと女の業ていハるゝ知るも
ものて親ものゝとふ一筋ゝさまをとふ思ぞ
ものきくをてみも入聟のものをさまゝ云云先
第ハ出れゝてあるものあるふ入聟のものをきめふ
ものゝ今を所をも拵ものて十月りものて
親類の内ふ坊き空小屋のゝりつをせちふをて借文
釈ものあ拵てをを入りて銀銭をしてすり長ゝ
其年十二月り竜云云ものを知ものれば

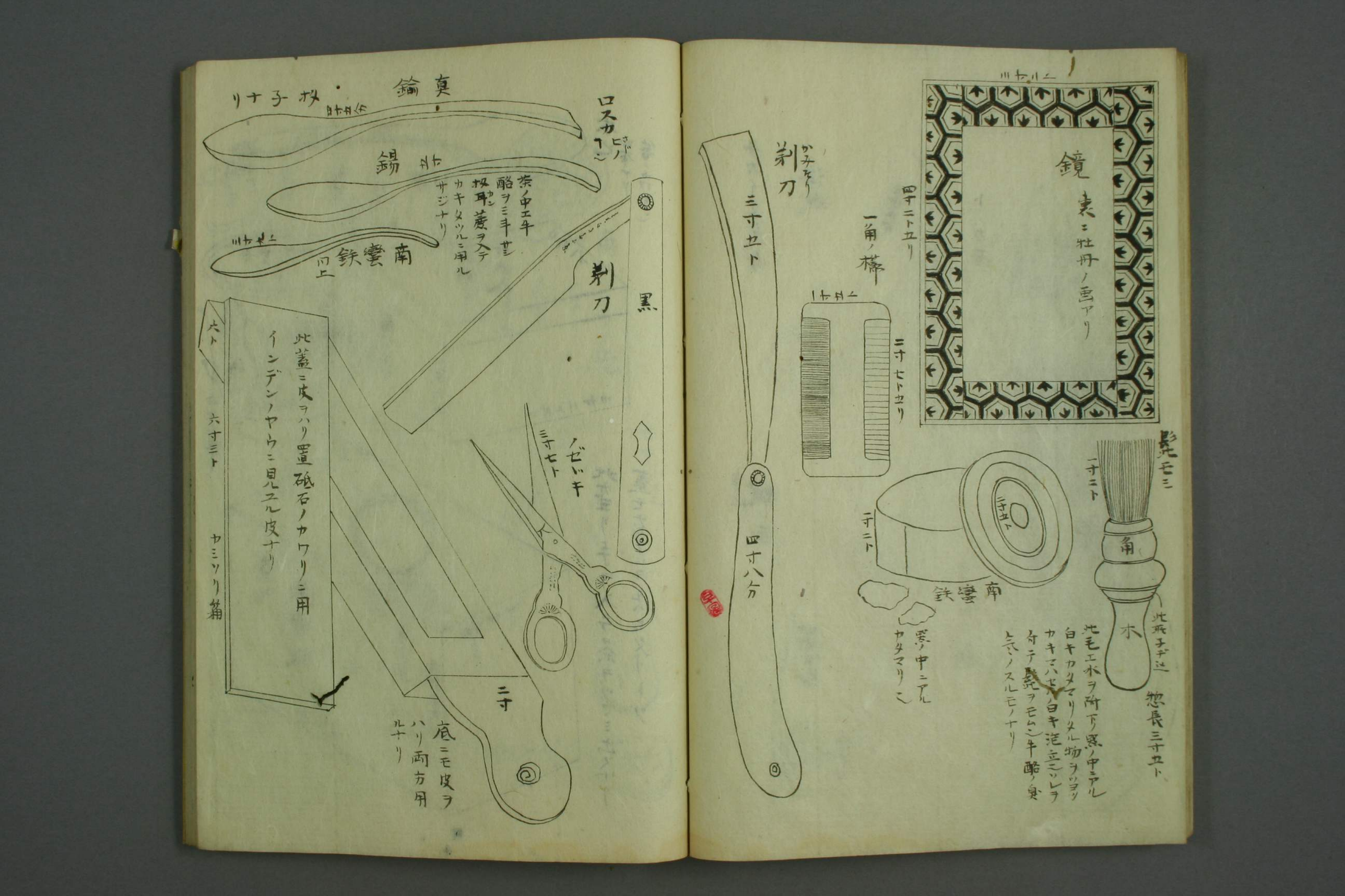
皆人感しあへり今にて拙者ハ陸奥より来り三十日も過て
尾州より四拾ふたをさへられうるへて二人扶持ふ石ら
六石の賜りものをなを宣ハ七石二人扶持を賜ひ
江戸之内小地谷御徒組と高知被
仰付候ふ七石二人扶持ふ
外十人ハ宮崎屋通りの人附尾州へ四拾人
ふ来りてあり
ふ来りてあり
ふハ十二三金ツしあるとて苗字等カ少て小栗之名
必名乗ていらめきあり
つりとふふかり私よりこそまひ辰ら絶ハ
ハ内流ハ
石碑を立て供養
今ハ
きをハ十二人の者ふ
あるをれハ
れハ人ふ
列絶しを業
ふの

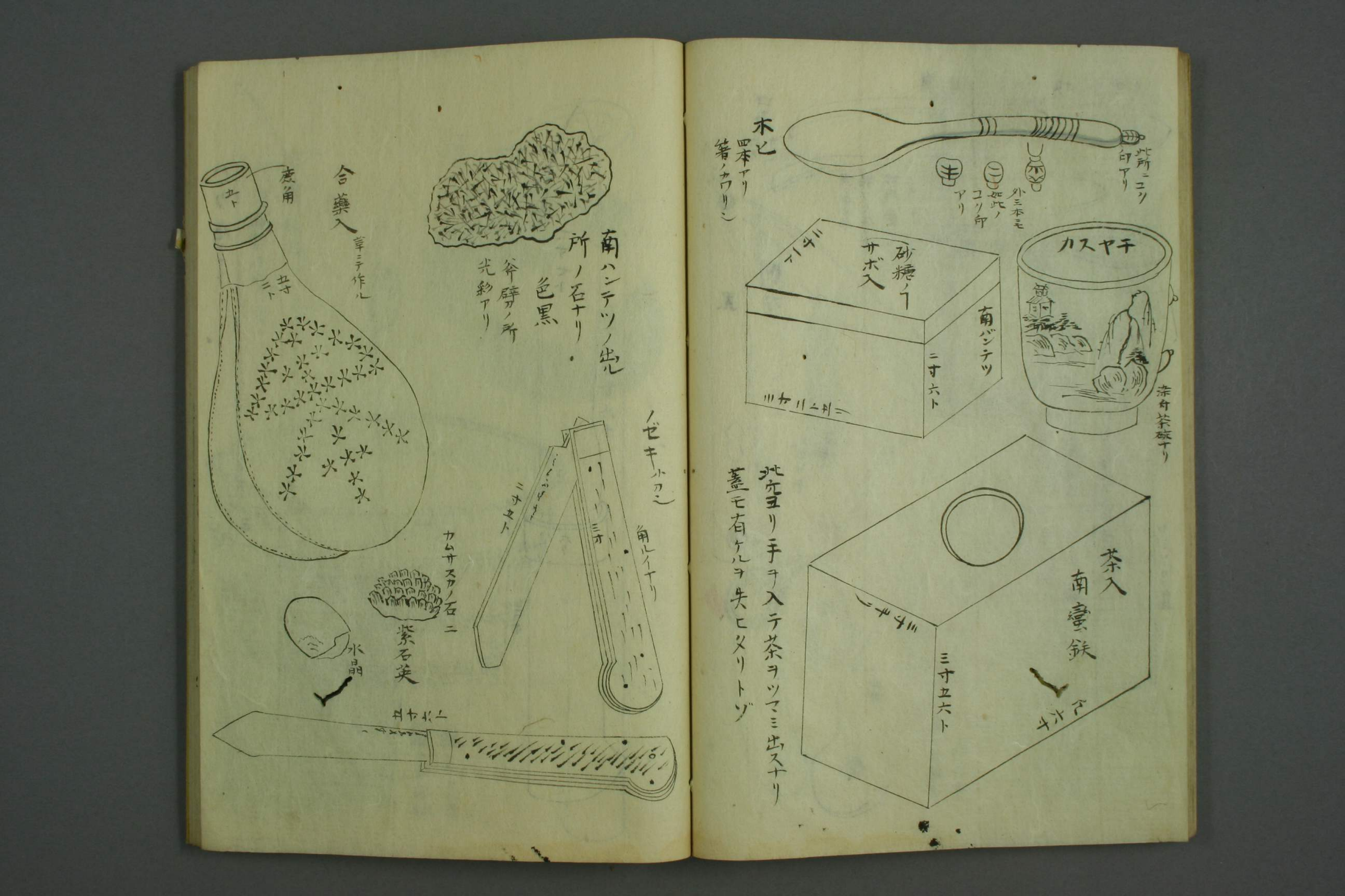
四月ばかりなれば此もとのごとく一年半斗りも
勤先辰之を和らせちふ別ひれハこと言ハ
四帰とかうう養生して快くなるとハ形又ハ知らも
んとるまを少て詩り物を見とられ墨の天性の人
のもりとれより君夜さ書をして妻子を養ひ
二人性格をバ不輝のもろふ通サ三人とも考延戒
七名能ハ世御君より言ふ異ハ物ハ
衣服笠物とハ覚しを也佐をれバ君古屋
ふづさ
楽へ引ふ年下せて不輝のもやれバ
料ともこれをとのもを異向の女房達ハ
恵をを詩ひり今をハ人ふ見ふるもを
長ふを文をこ川ふをを佐ふつきふ
て見ハ加をを
尾州の笠寺を多く此旅人の法来ふれを見
源の人ふ一遍の回向を文ん使りも
境内へ大成石牌ををんと斗りけふ
満ふりをを仕をを此記吉軍麻ありけ使りふをこふ
ていか衣服笠物をあまれ人とふをを一紙ず歳り

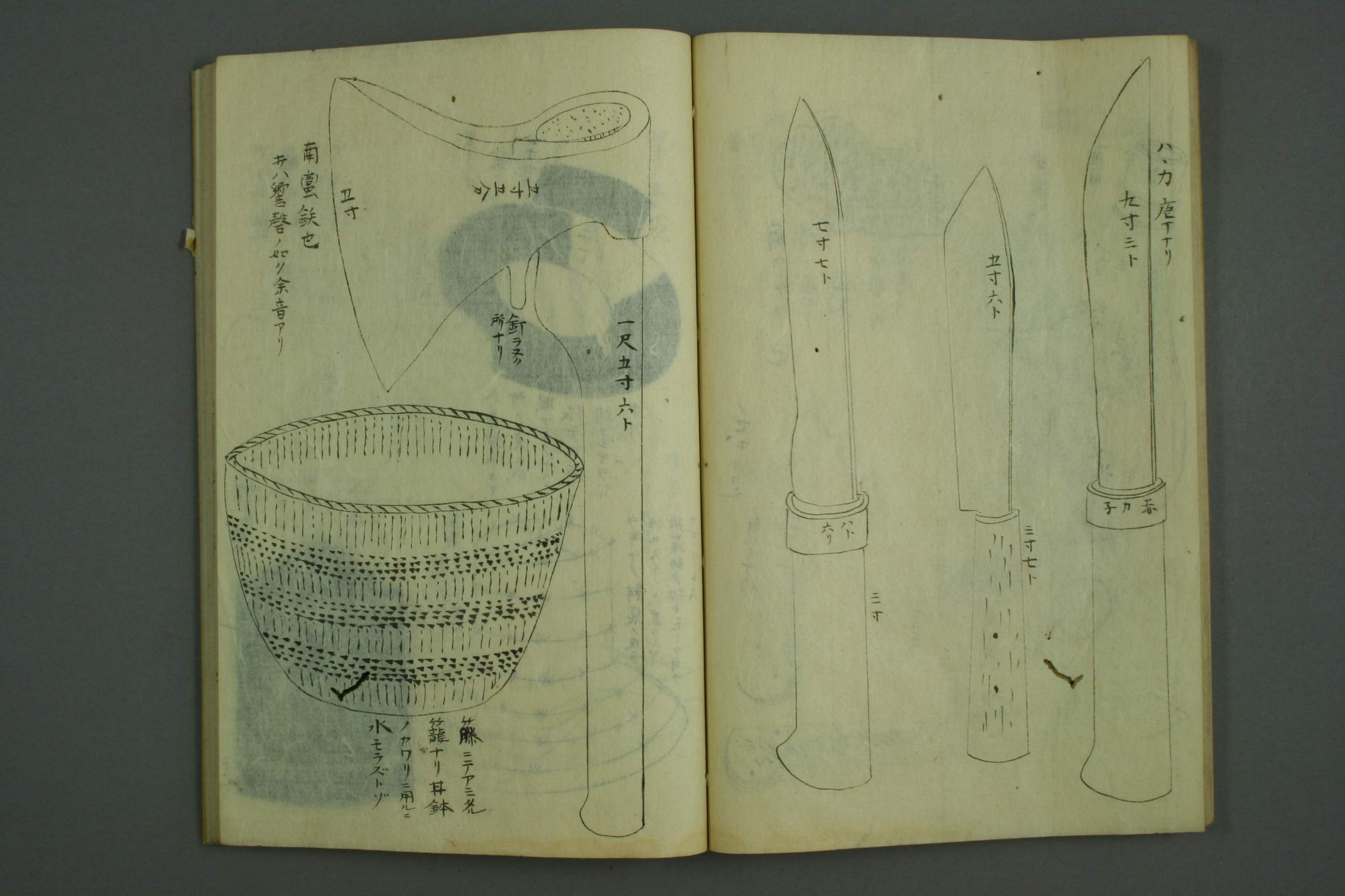
如力と文禄りて二十金年ろ成れハ山ノ俊ふ大ろ
石降と云うされも示供養を世代ノ
祠堂金を納んと牧も彼ふしを及て人しう忍を
始てさ年代料少はんとこ川さを乃りくよと
寺て初を也りてこ所ふしをしるるを始ハ意吉
ふしは山ノ延嵩向して五ヶ年始るのよ寺をつぢふ
寺まし小素作けるふ面ん



千カイダシベ牙
海獣
三寸五分
ト、カ牙
二寸七分五リ
六寸五ト
ヲキ十ノ歯
ちくらかこ
鯱ノ牙
四寸七分


鏡
裏ニ牡丹ノ画アリ
四寸二ト五リ
一角ノ榊
二寸七ト五リ
剃刀
三寸五ト
四寸八分
髭モミ
一寸二ト
角
木
柄長三寸五ト
柄モ木ヲ所下窓ノ中ニアル
白キカメマリメル物ヲツヨク
カキマハセバ白キ泡立ツソレヲ
分テ髭ヲモムニ牛酪ノ臭
ヒトノスルモノナリ
二寸二ト
三寸五ト
南蠻鉄
罫ノ中ニアル
カタマリニ
真鍮
ロスカピノ
ナ子ナリ
錫
茶ノ中ニ牛
酪ヲミキサシ
牧草ヲ入テ
カキタツルニ用ル
サジナリ
南蠻鉄
剃刀
黒
ノゼバキ
三寸七ト
二寸
底ニモ皮ヲ
ハリ両方用
ルナリ
此蓋ニ皮ヲハリ置砥石ノカワリニ用
インデンノヤウニ見ユル皮ナリ
六ト
六寸三ト
ヤミツリ箱


木匕
四本アリ
箸ノカワリ
北所ニコリ印アリ
外三本モ
此ノコリ印アリ
砂糖ノ
サボ入
南バンテツ
二寸六ト
カスヤチ
赤有茶碗ナリ
茶入
南蠻鉄
三寸五六ト
北所ヨリ手ヲ入テ茶ヲツマミ出スナリ
蓋モ有ケレヲ失ヒタリトゾ
南バンテツノ出ル所ノ石ナリ
色黒
斧壁ノ所
光彩アリ
合藥入
竿ニテ作ル
慶角
五ト
五寸
ノゼキ小刀ニ
三寸
角ルイナリ
カムサスカノ石ニ
紫石英
水晶


ハ、カ 唐ナリ
九寸三ト
赤カ子
七寸七ト
八ト六リ
三寸
五寸六ト
三寸七ト
南蠻鉄也
其ハ響磬ノ如ク余音アリ
五寸
鈎ヲ天ノ所ナリ
一尺五寸六ト
篩ニテアミ免
籠ナリ其鉢
ノカワリニ用ルニ
水モラズトゾ

アツシノ笠

藤ノ如クニテ
アミタル
モノニ

五寸

黒ラシヤ
笠
四寸六ト

三寸一ト

三寸一分

冬春雪ニテ白キ
所ノミ見ル故
眼アシクナルニ
依テ目通リエ
緋ラシヤヲ化
ナリ

ザブカ 頭巾ニ

黒ラシヤニ
綾合セ赤キ
ラシヤヲ
狭テ筋ト
ナシタル也

五寸

二寸八ト

笠袋 雨天ニアツシノ笠ノ
上エコレヲ覆フナリ

ヲキナノ鮮袋ノ皮ニテ
作ル又イメハ黒ラシヤ
緋羅紗ノ切トモトラ付テ
カザリトス

草ノ手袋

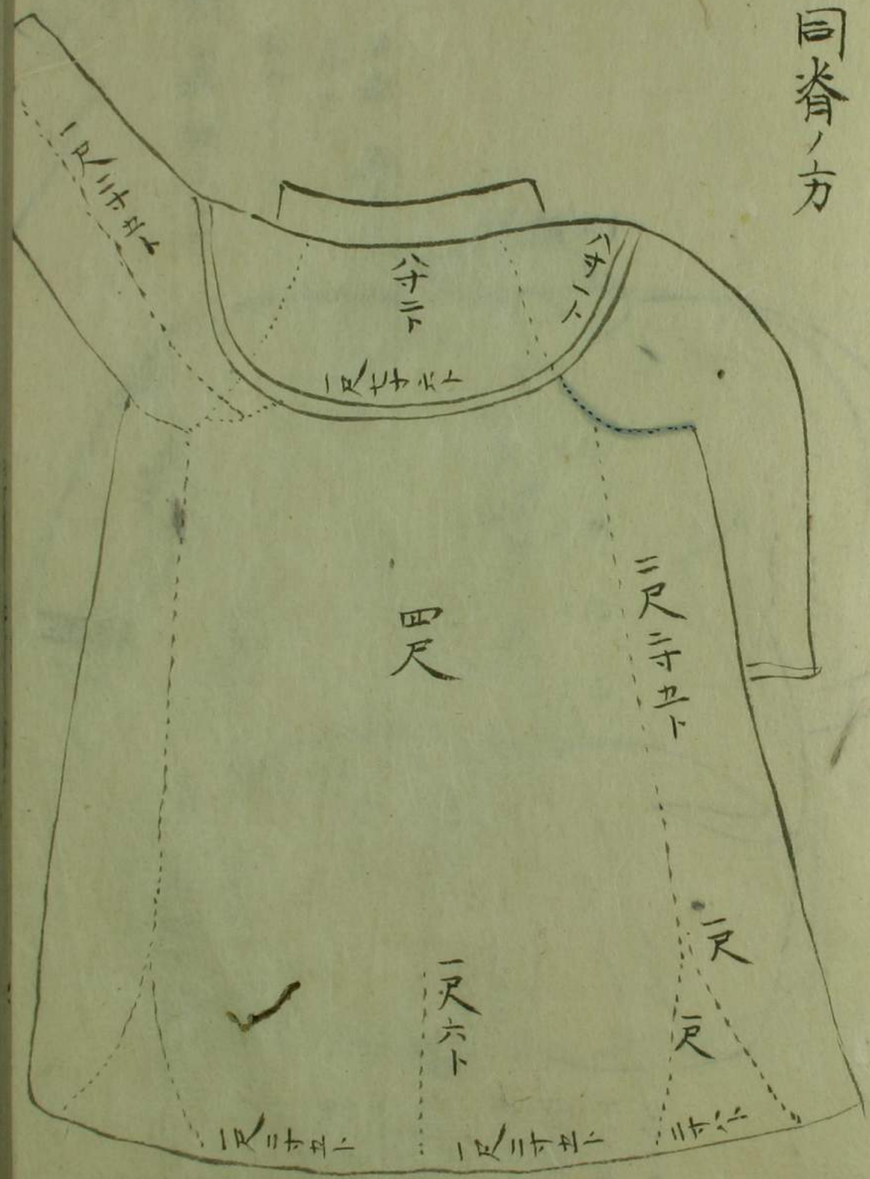
長七寸一ト

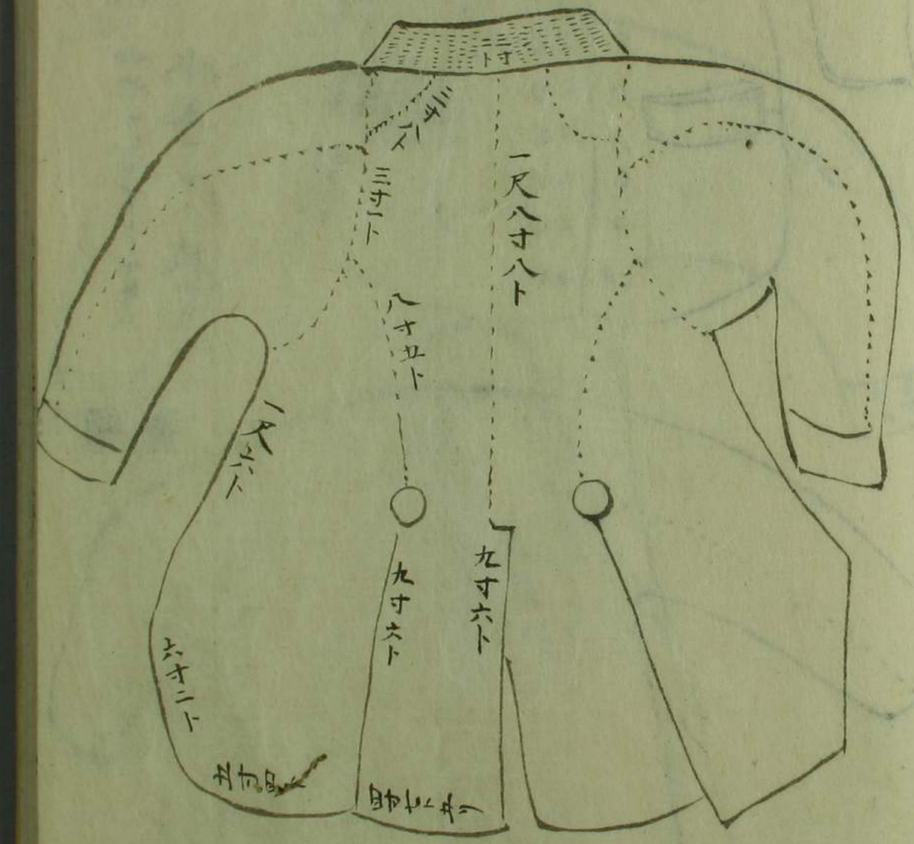
襟巻
方九三尺
七寸五ト

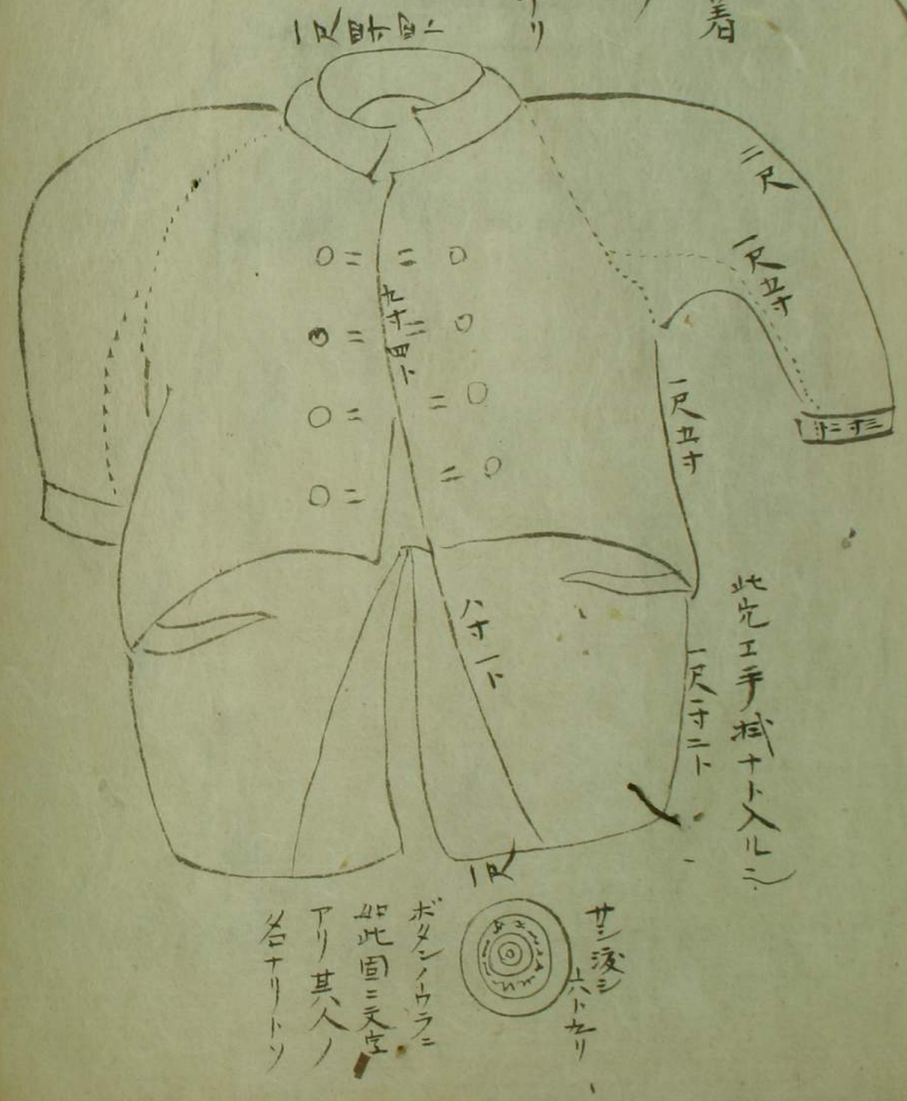
白キモメンナリ糸
細キ丁絹ノ如シ
キタイカトラ所
ニテ織タルトゾ

横シテハナレタル所ニ
ウラニモアリ

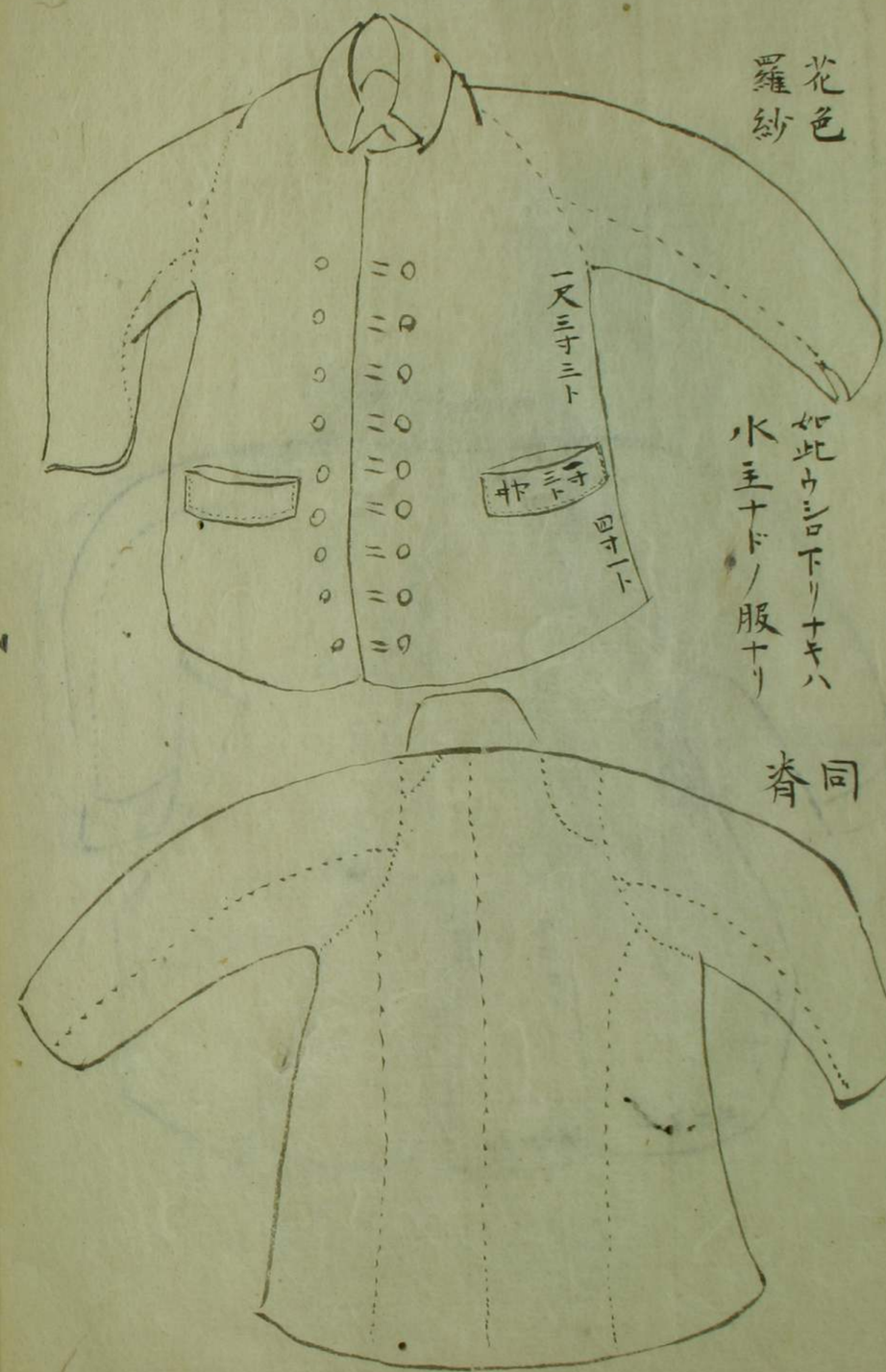
紬羅紗上着
大さ
一尺四寸
一寸三寸
二尺一寸三ト
一尺六寸九ト
二尺三寸一ト
四尺六ト
一尺


同脊ノ方
一尺三寸五ト
八寸二ト
八寸一ト
一尺九寸四ト
二尺三寸五ト
四尺
一尺六ト
一尺
一尺
一尺


一尺八寸八ト
九寸六ト
九寸六ト
八寸五ト
一尺六ト
六寸二ト


絽羅紗上着
如此ウシロノ
長キハ
上品ノ服ナリ
二尺
一尺五寸
一尺五寸
八寸一ド
一尺二寸二ト
此先エ手拭ナト入ル
ボタンノウラニ
如此国ニ文字
アリ其人ノ
名ナリトソ
サテ後シ
ハトカリ

花色
羅紗

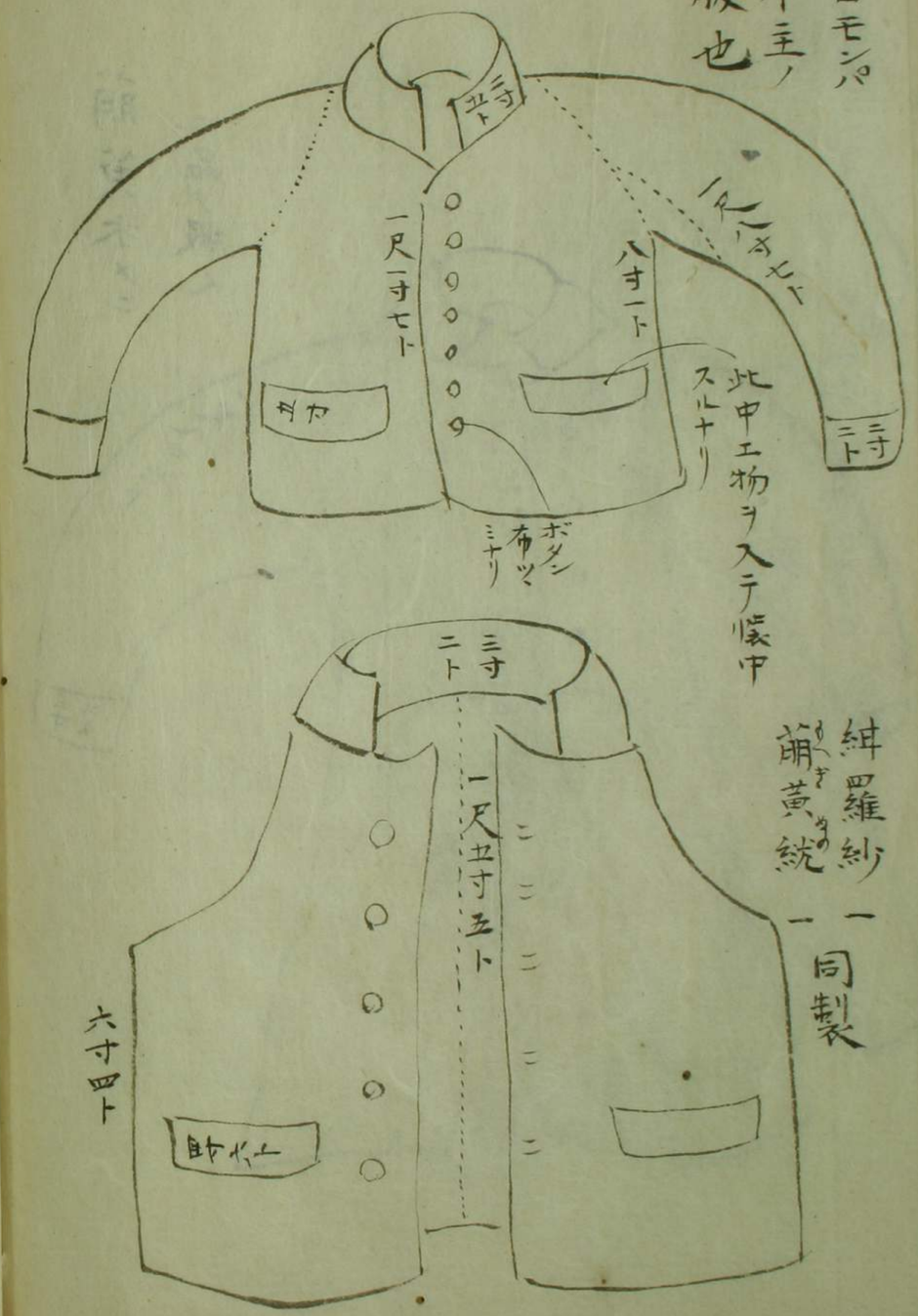


如此ウシロ下リナキハ
水主ナドノ服ナリ

同
脊

萠黄木メン
上品ノ服ニ

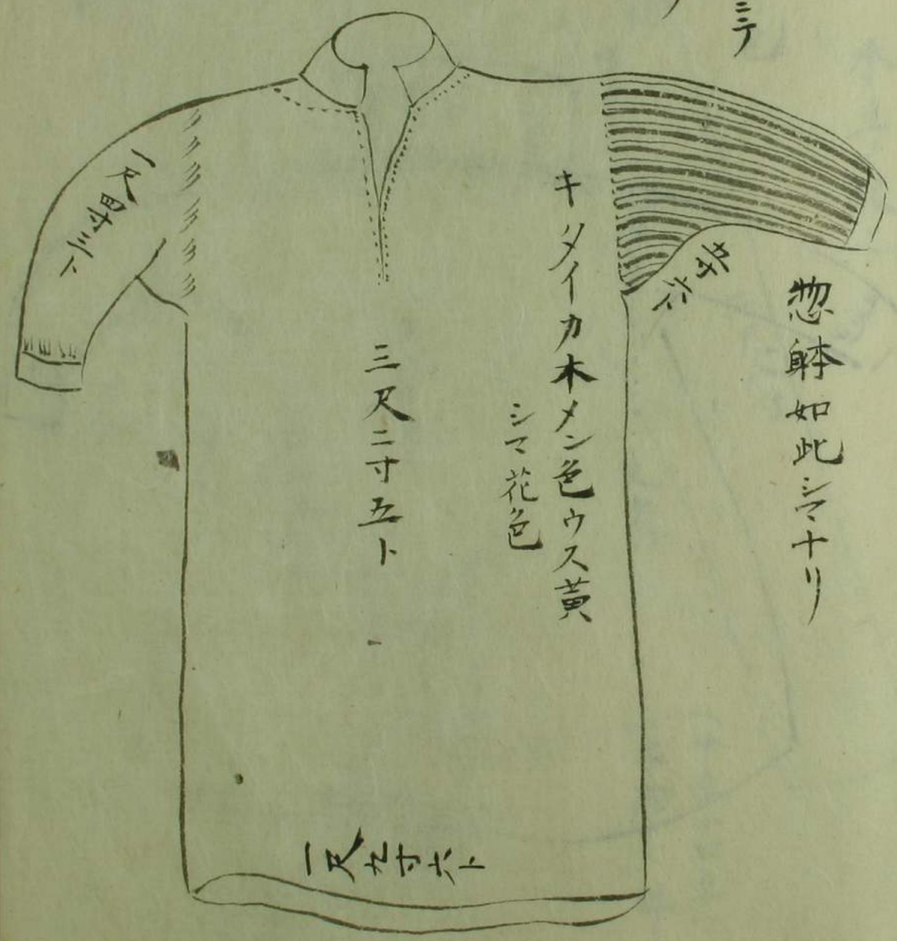
白モンパ
水主ノ
服也



紺羅紗 一
萠黄紬 一 同製

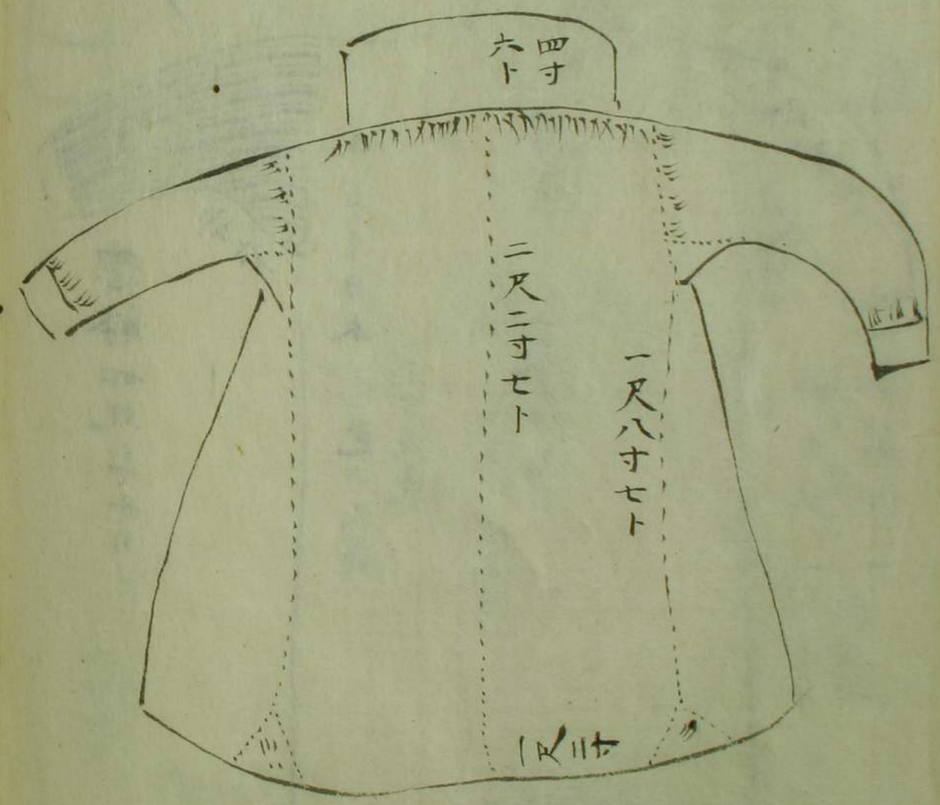
マン州 サンメン
キタイカト云所ニテ
織ル故則モメンノ
名トス

ヲルバカマ
襦袢ノ下ヽ
ハヾ縫メナシ
下ヨリ頭ヲ
入テ着ルナリ



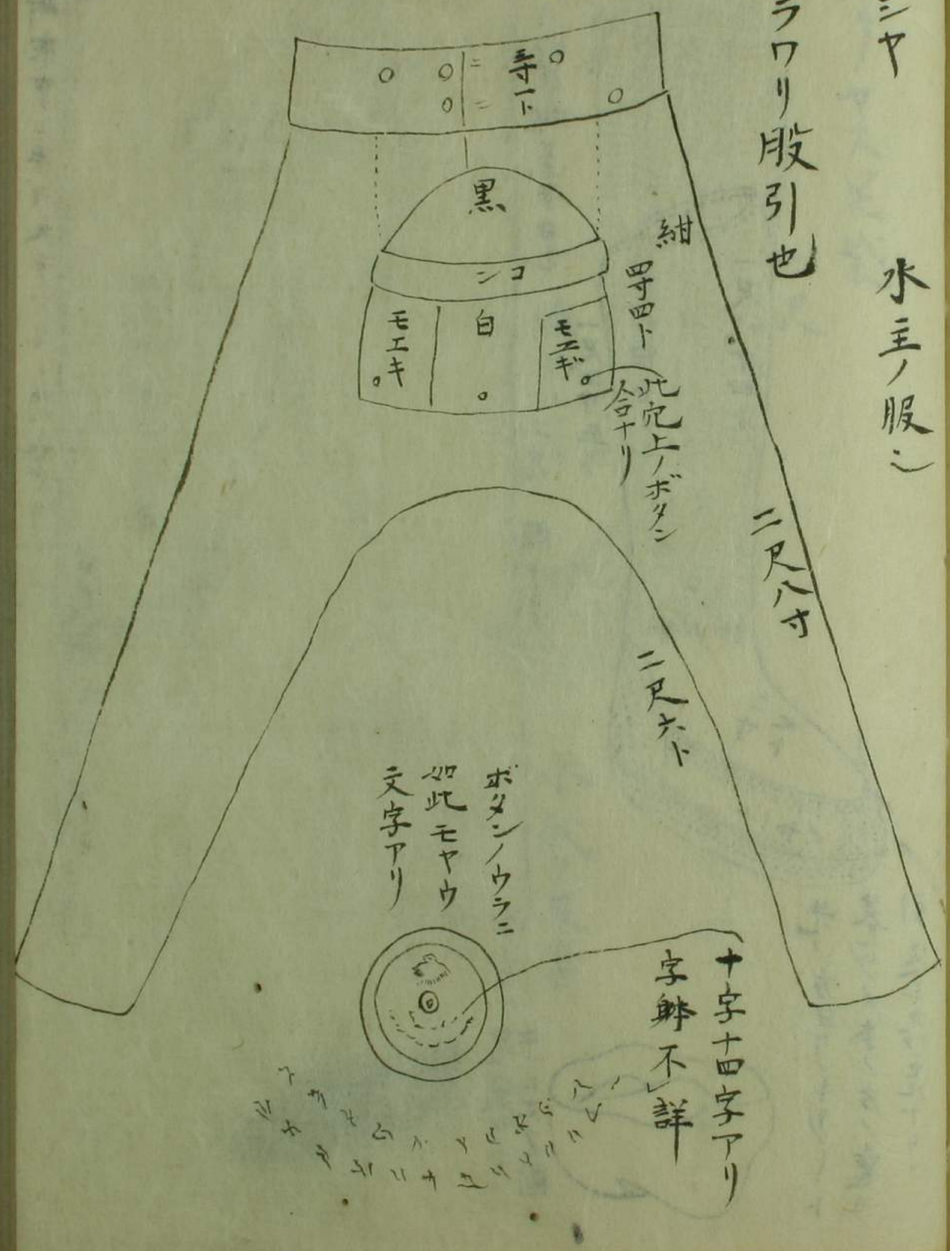
惣躰如此シマナリ

白木綿
シユバシ



ラシヤ　水主ノ服ニ

サラワリ股引也



此所寒中ニ手ヲ入テアタヽムル処十リ

三尺三寸セト

此穴上ノボタント合

五寸四ト

白ラシヤ地至テヨシ

上品ノ服十リ

一尺二寸五ト

白モメン

一尺八寸四ト

三寸セト

先ノ方ヨリキリ〳〵ト巻ツメ本ノ方ノ裏ヲ引返シカブセル十リ

足袋ヲタヽミ仕マヒオク圖

メリヤス足袋

二尺

白黒ノ糸ニテ織タル十リ

二尺三寸

同

一尺四寸三ト

水獺ノ皮沓

水中ヲハク沓ニ

一尺一寸四ト

ヤキ色

一尺二寸八分

雨天ノ時用 桐油ニ
大巣ノ餅袋ニテ製
縫メニ黒紅ノラシヤノ
キレトモニテ飾ヲ
付ル
紐ニテ
シメルニ
四尺
七寸五ト
カワキトル時ハ昂功紙ト云モノヽ
如シシメシテタヽム片ハ紙入ホトニ
ナルニスソヨリ頭ヲ入テ着ルナリ
アザラシノ皮
紐シウチノ皮也
長二尺二寸五ト
山羊ノ皮
一尺
八寸七ト五リ
毛薄黒
青サントメ革沓

雪中ノ簑十リ

惣躰 廣ニ

ヲレンノ皮十リ

是モ下ヨリ着ル

此毛熊ノ

腹コモ

リノ毛ニ

雪ノ白ヒ

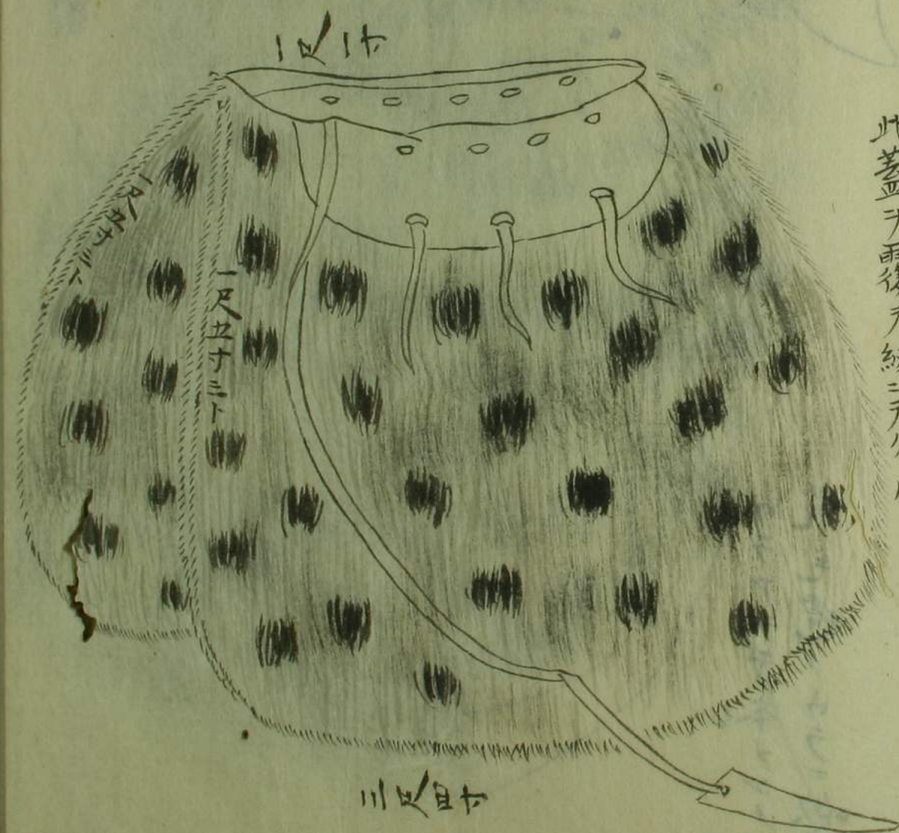
カヽラヌ為ニ

熊ヲミツヘナト云ニ

皮ノ裏

古渡ノ紅草ノウラノ如シ

水豹ノ皮袋
衣服ヲ入ルナリ
ツヾラノカワリ

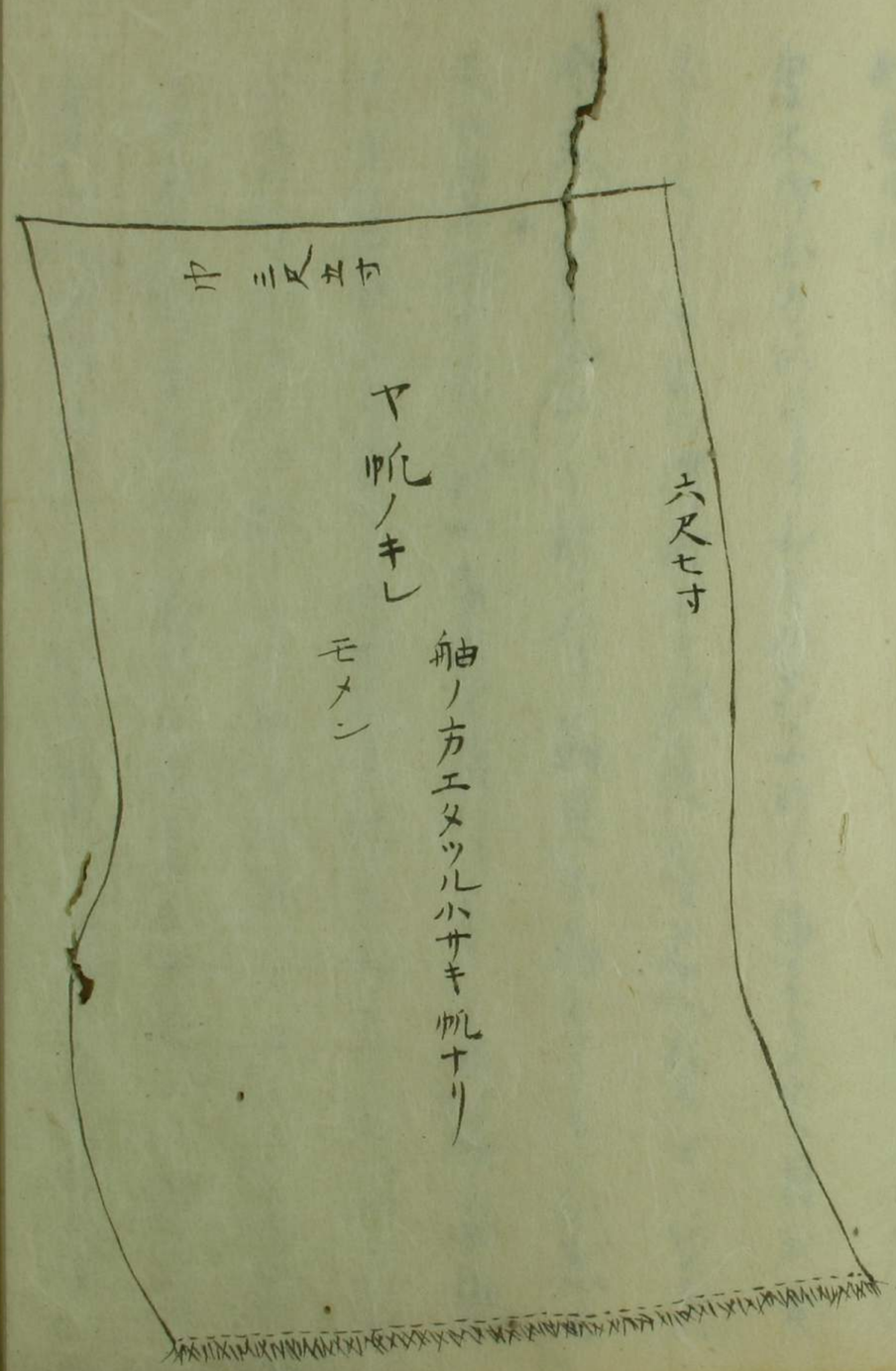


此蓋ヲ覆テ紐ニテリ、ル

是ニテ
穴ヲトヾ
テシバルニ

白兎ノ皮鉄薄團

ウラアラキ本メンノ類ニ
花毛氈ノウラニ似タリ



船長日記抜

皇大御宝の何とぞ[illegible]ふよ[illegible]く[illegible]りて用ひ交
まをしもとつ所代[illegible]ハ行ふハ
今来[illegible]よく詩井箱貝糸箱かもいと[illegible]
又所業泥の[illegible]人ハ[illegible]と[illegible]須玉藻と
ふ[illegible]ふ[illegible]つ[illegible]ハ[illegible]ハ
ほ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]心とつ[illegible]ふ[illegible]
ろ[illegible]ハ[illegible]世[illegible]ても[illegible]の中ふ[illegible]
ま[illegible]心[illegible]ハ[illegible]

二百六十年ふるき家ふ実ふ浦安[illegible]も[illegible]
ふくふとた是しあるまし年うる所代ふ[illegible]
りはやくあ史人薪[illegible]永久後[illegible]
業を業しと妻子うかうやつうらたとして明業ふ
なるまきくうまく食ひやすく紙外を大阪代の
御恵[illegible]ふさてもりたるこあてもたるふ
とさこうされはやくくとさふ毎人[illegible]
あくをひりうとハ皆いとものん所ふ物してるくを
ふとくておくり遅[illegible]
[illegible]もしふのりかひをも[illegible]物[illegible]ハ皇[illegible]
六よりき年をはるうる世界のてまてもくたふ
なりりかくて代永長の紀ハ尾張玉代舟人三色吉少
[illegible]ふくまれてはかるふものして
年月を経て伊の送り迎れなるふを年の冬家
学ぶをふもるくくる池田寛親ら生てし
しるふるんをけるもの
家ふもそくまびてるかるの物語を学つをハ物のつが
なのり母妻ふふもたくうの所りてことのはいてりを

三年てんぷの荒波のさかの八ツ汐のかぜに月見えるを
人々のこひおもふ事ちなてのあーき事彼地
人のこ作用ずきさま心ゆ人のうのぶさかてそも白ふ
笑辰て物ゆる中ふをを耳ふとまもかもの
とまつおぼれとかく学俗ふゆこそ古付意一枝
おきいろ次序をこしてきぬ物を枝を
しくよ大初て孫長の来こふもえて皇大四玉
のめてぶく大洲代のゆこ一けみ紀をもときまから
をへきしくさはひよとを枝をへ人物ゆいくまし弟れ

まりいそく方ゆるふのこまきれてをぬさるとりふ一を
新城の池田を地詠ゆりとて消息をて来つるとかき
ゆきこの年とゆるとをきゆゆ訂ゆきてえれハ地日記
足せ土おをせいるるを年利せをもん月の廿日をゆる
をはをよ物ゆんををれハいるくをゆくえ後てゆ人る
あゆはかきをかへくをくを年てをあゆりえをて
ゆしふを紀は美石ゆ学ゆるゆりハ仏くれを今一きさ
あしきゆもえをえてかしく物しる心用ひ紙をハゆをゆ
ゆゆ物を花ををふ同しくれをふをれしてを地

日記を小子の豊付り保さ世主てやもし情悲のあるかをてゆくゆくも明くしけるし書てゆくるふをを

文政六年四月十七日　　吉田中山英石

池田寛政ゆ去ゆ船長記を見て

大海ふゆを多くを花白張のしゆぬゆくゆきゆゆ

ゆき命ゆ年月もつて〳〵りし船人のゆ記世張を

きくゆことゆゆ記ゆをゆくくをふゆつをそを

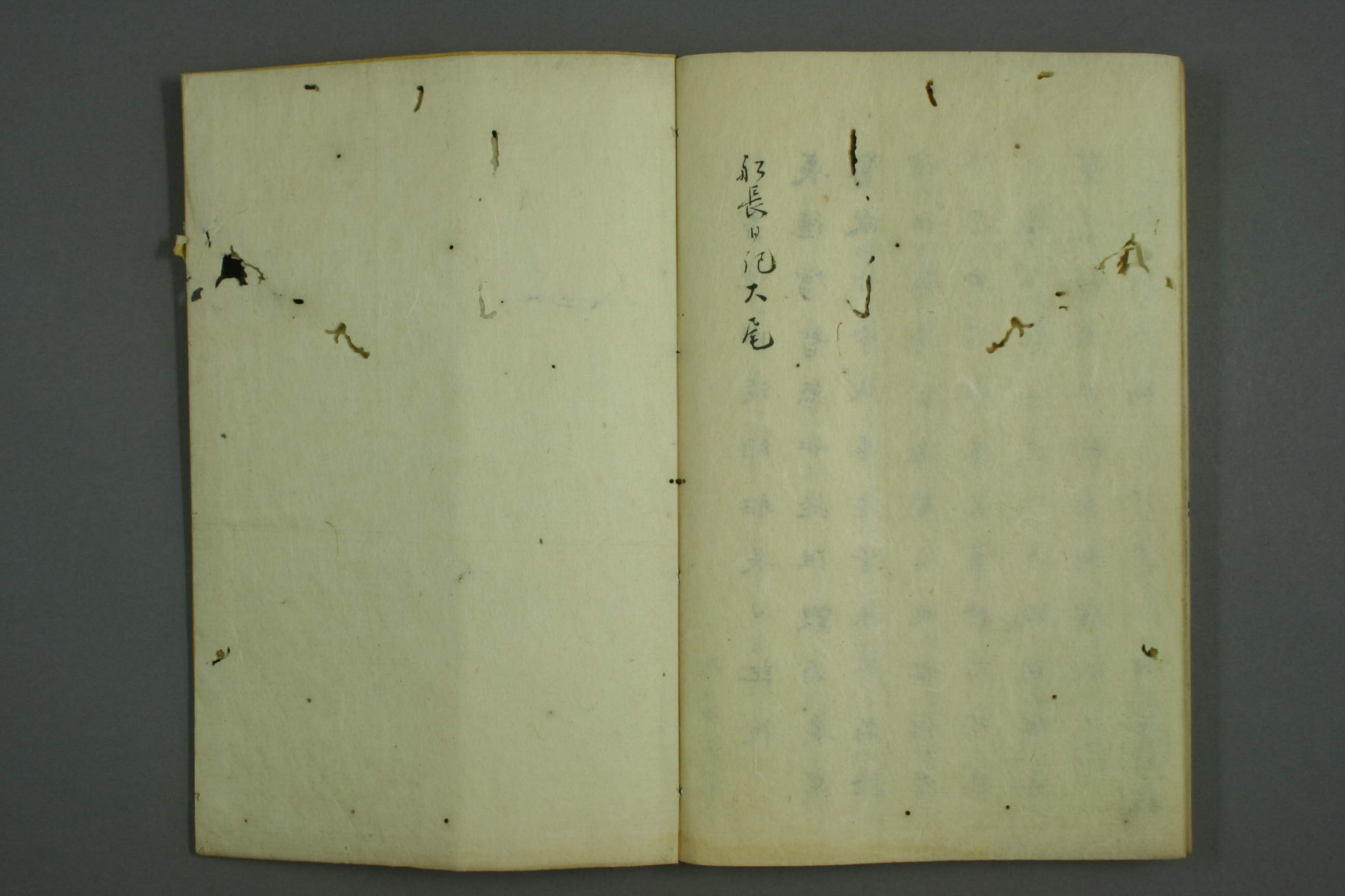
ゆゆまふゆをを記のゆくをりゆを

本居大平

書池田淡師船長日記後

長德增智無如經阻艱而廣異聞故古今成事者皆無不出於險阻艱備嘗適聞之後也何者以忍其不可忍之事於不可忍之間而增益其所不能也世之覽是記者亦將有所增欣

政酉冬初　　江戸　和氣行蔵



尾張日記大尾